
変な人しかいない二次元同好会

盛り上げ野朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変な人しかいない二次元同好会

【Nコード】

N4420U

【作者名】

盛り上げ野朗

【あらすじ】

とある普通の学校の話。昔からアニメが好きな高校生一年生。相坂翔一あいはるかは一人の女子生徒に二次元同好会というのに誘われ、入ることにした。

しかしそこにいた部員は皆おかしな奴ばかりだった。

オドオドしていてエロ物好きで絵がうまい先輩、由良夜時音ゆらやねね。

部の中で一番のオタクな同級生、入江昌いりえあきら。

無口で俺に付きまとう後輩、木嶋彩きしまあや。

そんな部員がいるアニメ同好会、果たして相坂はこの部員と仲良く

やっつけていけるのだろうか。

そして、その部で起こる様々な事件に立ち向かえるか？

第一話「勧誘」(前書き)

この小説はいろんなアニメのタイトル等がでます。
嫌だと思った人は即別の戻るをおしてください。
それでもよろしい方はどうぞ。

第一話「勧誘」

俺は現実がキライだ。別に親が嫌いとかそういうのではない
何事もうまくいかないこんな世界が好きになれなかった。

だからといって死ぬとかそんな事はできない。

だから俺は小学6年の時に現実から逃げるため二次元に手を出した。
二次元はとてもいい世界だった。

恋愛、シリアス、冒険、コメディなど、現実ではありえないことが
起こる。

そんな世界が好きになってしまった。

なので俺には二次元好きな友達しかいない。

語り合うこともほとんどアニメや漫画に関することだった。

そんな俺が高校二年時の事であった。

「バスケット部」。部員募集中です」

「バレー部に興味がある人はいませんか？」

帰宅しようと校舎から出ると色んな部活の勧誘が聞こえる。

俺が入った学校、守中高等学校は部活がたくさんある事で有名であ
る。

でも、俺はそんなものには興味は無い、この学園に来た理由は家が
近かっただけなのだから。

「・・・必死だね」

小さな声で呟きながら通り過ぎようとした時だった。

「・・・ねえ、君」

ギョツと袖を掴まれる。誰だろうと思ひ振り向こうとしたらそこに
は一人の女子生徒がいた。

胸部の名札を見ると3 1と書いてあった。

どうやら先輩のようだ。そして片手には小さな小説本を持っている。

「なんか用ですか？」

たぶん部の勧誘だろう。と思ひながら聞いてみる。その先輩はゆっ

くり口を開いた。

「に、二次元同好会・・・入ってみたい？」

「あー、すみません。最近ちよつと忙しくて部なんか入れな・・・え？」

聞き間違いだろうか。今、何か聞こえたような気がした。

「す、すみません。今なんと？」

すると再び先輩はゆつくりと口を開く。

「二次元同好会ですけ・・・」

「是非見学！いや、入部させてください！！」

あまりに感動してしまい、即答えを出してしまった。

「は、はい。あ、一応名前を教えてくださいませんか？」

俺は目をキラキラしながら自己紹介する。

「相坂翔一です。好きに呼んでください」

「翔君ね、私は部長の由良夜時音。皆からよく由良ちゃんって呼ばれます」

由良先輩か。でも、こんな人が二次元好きなんて驚きだ。試しに聞いてみる。

「由良先輩ってアニメとかよく見ますか？」

「ア、アニメは見ますけど・・・ちよつとエロティックなものですかね」

ちよつと恥ずかしそうにしながら何言ってるんだこの先輩！

「因みに、パンチラとかポロリとかそこらへんが一番・・・」

「ス、ストップ先輩！色んな意味で危ないですから！」

この人なんかヤバイ、色々とやばすぎる！

「他に好きなものと言えばエロゲーですかね。」

言っちゃった！ついに言っちゃったよこの人！しかも結構人いるところだ！

「一番好きなものはヨスガノ・・・」

「やめて！！それ以上はいけない！！」

全力で先輩を止める。この人見掛けによつてすごいなおい。

「あ、すみません！私ったら人がいる場所だとんだ発言を！」
顔を真っ赤にしている。どうやら素で忘れていたのかもな。

この先輩、部長なんだよな・・・だったら後輩はもつとひどいんじゃないか？

「でもよかった。あなたで後輩3人目ね。これで部員は4人になるわ。」

(少な！しかも俺入って4人って、先輩あんただけかよ！)
心の中でツッコむ。俺本当に行って大丈夫なのかな。

「とりあえず部室に行きましょう。他の皆にも紹介しないと」

「は、はい」

俺は不安に思いながら先輩の後を付いて行く。どうか、他の奴らはまともな奴でいて欲しい。

そう思い俺は先輩の後を付いて行く。

第一話「勧誘」(後書き)

こんにちは、盛り上げ野朗君です。

第一話いかがでしたでしょうか。

自分的に文が少ないきがしますがどうでしょう。

二次元同好会ってどっかの高校にないかな・・・

そんな今日この頃です。

質問等があったらコメントでお答えします。

因みにケータイの方で協力連載してます。

そちらの方も頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

第二話「部員& a m p ;顧問」

一度も来た事のない三階を由良先輩と一緒に歩く。なぜならこの学校の教室は一、二階しかなく移動する授業が無いからだ。三回はほとんどの部屋が各部活の部室となっている。といっても文化部の部屋しかない。それぞれの部屋のドアを見ると茶道部や三味線部など色んな部活の部屋があった。皆一生懸命に頑張っている。やはりやりたい物があるからあんなに頑張れるのだろうか。そう思いながら温かい眼で見る。しかし、こうして三階からグラウンドで頑張っている生徒を見るととても小さく見える。こんなにも三階が高いとは思ってもしなかった。そして、俺はあることに気づいた。

「そういえば二次元同好会っていつできたんですか？」

俺が一年の時はそんなものは無かったし、今年の部活紹介の時もそんな部が無かった。こんな俺だ。そんなものがあつたらすぐに飛び込んでいるはず。すると由良先輩はにっこりしながら答える。

「実は二週間前にできたばっかなんですよ」

（出来立てホヤホヤじゃねえか！！しかも二週間で俺いれて4人ですすごいなあんだ！）

口には喋らず心の中で突っ込んだ。さすがに驚いてしまうのではないかと思ひ。

「皆、優しくて私本当にうれしかったです。念願の部が作れて本当によかったです」

「・・・そうなんですか」

「翔君もありがとございます」

「え？翔君？」

俺は少し驚いた。初めて言われる呼ばれ方だからだ。

「翔一だから翔君。だめですか？」

由良先輩は少し困り気味に言う。

「いや、別にだめってわけじゃないですけど・・・いいですよ」

「ありがとうございます。ふふ。やっぱり翔君って変わった人ですけど優しいですね」

「そうですか？（あんたに言われたくないよ！）」
「ええ、とつても」

どうやら自覚はしていないそうだ。満面な笑みでこっちを見てくる。そんな目でこっちを見ないでください。なんか泣けてくるから。

「では翔君。行きましょうか」

「は、はい」

そしてまた由良先輩に付いて行く。さっき念願のって言ってたけど何か作る理由があったのかな。

ま、今は聴かないでおくか。

.....

「ここが私達の部室ですよ」

数分歩いていると由良先輩が一つのドアに手を伸ばす。ここが二次元同好会の部室。ドアの真ん中の紙に綺麗な字で二次元同好会と書

かかっている。誰が書いたんだろう・・・

「あ、この紙私が書いたんですよ」

若干そうだろうと思ったよ。なんとなくイメージ的に・・・

「多分もう中に二人とも入ってると思うから入りましょう」

「は、はい」

すると由良先輩はドアを躊躇無く開ける。俺の心の準備がまだだと言いつのに・・・

「二人ともー。新しい部員見つけて来ましたよー」

ドアを開けた先には漫画本を読んでいる男子生徒とパソコンを使っている女子生徒の姿があった。

「本当ですか由良ちゃん先輩」

まず男子生徒の方が反応した。どうやらこの生徒に由良ちゃんと呼ばれているらしい。

「・・・よかった」

今度はもう一人の生徒が反応する。近くに脱いでいたコートを着て立ち上がる。

「ええ、相坂翔一君で昌君と同じで2年です」

「ど、どうも」

俺は焦りながら小さく礼をした。俺は自己紹介するのが少し苦手なのだ。

「へえ、僕は入江昌。よろしくね相坂君」

入江は俺の手を掴み、握手をする。髪型は薄い茶色で短髪だった。身だしなみはきちんとしていても性格のいい奴だった。

「そして、この子が一年の木嶋彩ちゃん。ちょっと無口だけどいい子なんですよ」

そう先輩が言うと彩と言う子が小さい声で「どうも」と言う。本当に無口なんだな。髪型はロングで銀、頭に花の髪飾りをしていて以外に身長は女性にとっては小さい。

「マスコットキャラみたいでかわいいですよね」

まあ、悪くは無いな。そのくらいの方がピッタリだ。しかし、同好会と言っても結構部屋が広がった。椅子が三席、パソコンに使う椅子を加えて四席ある。部屋の右端にはたくさんの本があり、その隣にはポットや冷蔵庫があった。なかなか快適な場所なんだな。

「んじゃ翔君。早速だけど何をする？」

「え？」

俺は入江に対して驚き、「三秒考えてから質問をする。」

「な、何をするって？」

「あ、そういえばこの部活何をするか言っていなかったですね」

と先輩は言つとコホンと一回咳をする。

「えーと、この二次元同好会はアニメ、漫画、ゲームなど色々なものを見て、どんなものだったのかその完成度とかを皆で言い合う部活なんですよ。」

「ゲーム!? そ、それって規則上だめなんじゃないんですか!？」

普通の学校ならそういうものは即没収決定に決まっている。しかし、

「ううん、ここの部だけそういった規則は許されているんだ。じゃないとこの部、二次元同好会の意味が無いからね」

「そんなすごい部活に入ったんだ俺」

あまりの言葉にガツクリとする。そんな部活だなんて思わなかったからだ。以外にすごい部活だったんだな此処。

「じゃあ、気を取り直して何をする?」

学校じゃ絶対見られない家庭用ゲーム機やアニメのDVDがぞろりとでてきた。

例えるなら畳一枚分くらいだな。

「ゆ、夢みたいだ」

「アニメのDVDは一応私の私物なんです。」

マジかよ!?! このDVD全部この人の!?! すごすぎる。

「ゲーム機は昌君と彩ちゃんのなんです。」

「僕らの中の最高作品を持ってきてるよ」

「コク」

確かに、見てみる過去の作品で人気になったものが勢ぞろいしている。

RPG、アクション、ホラー、アドベンチャー、恋愛シミュレーション、これは絶対入江のだな。といった物がたくさんだ。なんか、今思うと本当にこの人たちすごいと思う。なんというか・・・二次元をものすごく愛していると言うか。とにかくすごく感じる。

「それじゃあ私はいつものを・・・」

すると由良先輩はパソコンを開きだしあるファイルを開く。そこには大量のエロゲーが入っていた。そしてその一部のファイルを開く。

「ちょ、由良先輩!？」

「はい?なんですか?」

キョトンとした顔でこちらを見つめる。

「いや、なんですかじゃなくて先輩学校ですよ!？」

普通のゲームはいいとはいえそれはさすがにちよっと」

この人、本当にそう言う系好きなんだな。なんか本当に危ない気がする。

「大丈夫ですよ。いつものことですから。それより翔くんもなにがやっててもいいですよ」

イヤホンを刺し、完全に一人モードになってしまった。

「由良先輩はほっというて。とりあえず、相坂君は何が得意?」

入江が俺に質問をしてきた。それよりもほっとくつてそんなスキルはまだ俺は習得していないのに。しかし、とりあえず俺は入江の質問に答える。

「とりあえず全部の種類ของเกมができるよ。入江は？」

すると入江は一回深呼吸をする。

「僕もほとんどのゲームができるけど一番はやっぱり戦争ゲームかな。武器を持ち敵に近づき相手を狙いあう。とてもいいゲームだよ」「そ、そうなのか」

・・・案外コイツゲーマーなのかもな。

「そのほかにも恋愛とかアドベンチャーも好きだけど見過ごせないのはやっぱり・・・」

「さて、とりあえずその話は今の所聞かないでおく。」「ん」

そんなことを考えていると彩が俺に携帯ゲーム機を渡してきた。彩は渡した後渡したものと同じ携帯ゲーム機を出してきた。カセットの中身を見るとそこには今も人気なパズルゲーム。テトリスである。これで編み出される言葉。

「対戦したいのか？」

「コク」

どうやら正解のようだ。ニッコリしながらうなずいていた。すると入江が俺に近づく。

「気をつけた方がいいよ相坂君。彩ちゃん結構強いから。」

彩を見るとさっきの笑顔とは違い真剣な顔になっていた。

「負けない」

以外に覇気があるセリフだな。しかし

「ま、俺も結構パズルゲーム得意なんだぜ？」

俺の友人達にに完封勝利をしているほどの実力だ。侮られても困る。

「頑張ってください翔君」

由良先輩が俺を応援してくれていた。もしかして、俺が負けると思っているのかな先輩。

「分かりました」

一言返事を返し俺も真剣な顔になる。そして彩との対戦が始まった。

.....

「くそー！負けたー！ー！ー！」

後もう少しと言つところで負けてしまった。ものすごくくやしい。

「さすがに今の戦いは僕でもマネできないよ」

俺たちの戦いにさすがの入江も感心していた。

「まだまだ俺も弱いな」

普通にテトリスをやっている人なら約十二秒で一つの列を消すくらいだろう。しかし、俺はその十二秒で約二列を消すことができる。だが、彩はそれより早く九秒で二列を消してくる。少しでも気を緩めてたら即負けだっただろう。確実にブロックを消してきていた。迷いなくだ正直言つと俺が甘く見ていた。まさかこんなに早い奴がいるなんて思わなかったからだ。しかも後輩つて・・・泣けてくる俺がそう思うと急に彩が俺に近づき頭をなでに来た。

「そんなことない。シヨウ、強かった」

ん？シヨウ？まさか俺のことか？

「しょ、シヨウ？」

「ま、まさか彩ちゃんから話に入ってくるなんて」

入江と由良先輩が彩の行動に驚きを隠せないそうだ。

「シヨウ・・・よくやった。よしよし」

ものっそい呼び捨てされている。一応後輩だよね？まあ別に気にしないけどさ。っーかよしよしって犬は俺か。

「どうやら完全に好かれちゃったようだね相坂君。罰ゲーム考えてただけどそのあだ名いいかな相坂君」

「ニヤニヤしながらこっち見んな。別にそんなんじゃねえし、罰ゲ

「ムにもなんないだろ」

「いやいや、いい方だよ。僕なんて最初のおだ名入江門なんだから」
「センス悪！っーか江戸っばいな！」

入江門って、どっかの四次元ポケットをお腹に持っているロボットじゃないんだし。

「そんなことない。入江門かわいい」

「どこがだ！！」

彩の素のポケと入江のツッコミが入る。漫才かお前らは。ため息をしながら彩になでなでされながらも俺は椅子から立ち、由良先輩の近くによる。

「俺、ちょっと不器用なところもあるし。迷惑になるかもしれないけど、この部に入ったからには一生懸命頑張りますからこれからよろしく願います」

「ええ、これからもよろしく願いますね」

俺は由良先輩と握手をする。

「僕からもよろしくね」

「・・・よろしく」

入江と彩が俺の肩を叩く。こうして晴れて俺は変な人しかいない二次元同好会の一員となったのだ。といっても皆良い人だらけだった。ちよつとエロ物好きだけど優しい、由良夜時音先輩。

色んなゲームを好むゲーマー、入江昌。

パズルゲームを得意とする後輩、木嶋彩。

そして、二次元のすべてを受け入れる俺。相坂翔一

こんなメンバーだけど、楽しくやっていけそうだ。

「それでは、次は何をしますか？翔君」

「そうですね」

そう言いつつゲームを見ています・・・

バダン！！

「おーっす！皆やってますかー？」

誰かが部屋に入ってきた。学生服を着ているわけではなく。私服を着ている。そしてものすごく小さい女の子だ。

「女の子？何でこんなところに？」

おれは最初そう思った。しかし。

「うわあ！私の事を女の子、って呼んでくれる生徒なんて初めてですー先生うれしいですよー」

・・・はい？

「しよ、翔君。この人は新崎^{にいざき}恵里^{えりか}花先生^{せんせい}って言って私のクラスの担任教師です。そしてこの二次元同好会の顧問です」

「えへへーよろしくですー」

・・・どう返事を返せばいいかわからない。だって小六くらいの大きさで先生？どんだけ成長してないんだよ。実際ありえないだろ。

「あらら、相坂君、随分と唾然しているじゃないか」

「・・・シヨウ、信じられない？」

止まっている俺に入江と彩が声をかける。俺はその声で正気を取り戻し、首を振る。

「いや、信じられないとかじゃなくてちょっと驚いたただけだよ。それに由良先輩が言ってるんだから真実なのは確かなんだし」

「すみません。内面疑いました。」

「実は、先生が私のためにこの部を開いてくれたんですよ？」

「そうなんですか。でも、なんでこの部を作ろうと？」

絶好の聞けるチャンスだと思った俺は由良先輩に聞いてみる。

「私のお父さん。ゲームのグラフィッカーの仕事をしてるんです。だから家に帰ってくるもの遅くて、あまり会話ができないんです。でも私お父さんの仕事を誇りに思ってますよ？私もいずれそんな仕事をしてみたいから。だから私もゲームとかそんな関連のことを知りたいなって思ってたこの部を立ち上げたんです」

「そんな話があったんですか」

何故だろうか共感してしまう。やはりそう言うもの同士だからかな。つか、もしかしてエロゲが好きになった理由ってもしかしてその勉強のために開いたのがそれで目覚めちゃったとか!?

「昌君と彩ちゃんも放送委員会知り合ってた。それで誘ってみたらなんなく入ってくれたんです」

なるほど・・・だから二週間に三人も集まったと。

「そしてーそこに相坂君が入ってくれたって事ですよ」

先生の言う通りだ。そしてすべてが繋がった。

「あ、そんなことより来週から重大な企画をやるうと思っています

ー」

「『『重大な企画？』』」

全員が先生の言葉に首を傾げる。

「そうです。来週の街中のシューティングゲームの大会に三人・・・
じゃなくて四人で参加することです！」

「『『シューティングゲームの大会！？』』」

入ってばかりに降りかかる初めてなことばかりが起こるこの二
次元同好会。

一体俺はどうなってしまっただろうか。

第二話「部員& a m p ;顧問」(後書き)

いやあ、夏だね。盛り上がりたいね。

こう言う時って何をすればいいのかな？

まあ、今季も引きこもるけど・・・

小説の書き方を変えてみました。どうでしょうか。

もし見えずらい、ここはこうした方がいい、などがあつたら感想で書いていただければ幸いです。

夏中にはもう一話書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4420u/>

変な人しかいない二次元同好会

2011年11月16日21時17分発行